



循環型建築として、神社の緑青銅板を外装で再利用

和國商店

わくにしようてん

株式会社ウチノ板金
隈研吾建築都市設計事務所
岡庭建設株式会社



岡庭建設株式会社 専務取締役 池田 浩和 氏	隈研吾建築都市設計事務所 主宰 隈 研吾 氏	株式会社ウチノ板金 代表取締役 内野 友和 氏
------------------------------	------------------------------	-------------------------------

建築板金職人×世界的建築家×
地域工務店のコラボレーション
「神社の屋根を再利用した緑青銅板外壁のカフェ」

2024年1月19日、東京都東村山市の青葉商店街にカフェ「和國商店」がオープンした。築52年の空き店舗をリノベーションした建物で、神社の屋根に使用されていた緑青銅板を外壁は覆われている。

板金の工芸品の展示販売も行う「和國商店」が目指すのは、地域活性化と職人技術の継承だ。このプロジェクトの発起人であるウチノ板金の内野友和氏、建物と内装のデザインを担当した建築家・隈研吾氏、設計施工を担当した岡庭建設の専務取締役・池田浩和氏のお三方にお話をうかがった。

隈氏のデザインから膨らんでいったアイデア

「隈さんからいただいたデザインを見て、これは銅板でやると面白いんじゃないかな、と思ったんです」
外壁に銅板を使うアイデアの源泉をたずねると、内野氏は笑顔でこう切り出した。内野氏は「和國商店」を通して地域を活性化させ、職人技術の継承をしようと考えていた。この想いに感銘を受けた隈氏は建物のデザインを引き受ける。

「内野さんが作った銅の折鶴の品質に感動してね、立体的なもので覆われた建物がひらめいたんです。神社の廃材を見たのはプロジェクトが動いている途中でですね」
最初から着地点が見えていたわけではない。さまざま

笑いながら、池田氏が当時のエピソードを話してくれた。
「とにかく隈さんのデザインが斬新でしたから。これを既存住宅でどう再現しようか、と考えました。昔の建物なので、耐震や断熱の面で改善点も多い。課題は多かったけど、隈さんのデザインを活かす大工技術が実現できたんじゃないかと思えます。まあ、表には出てこない部分ですけどね」

と冗談っぽく言いながらも、大工の職人技術をしつかりと発揮することができたと池田氏は真剣な眼差しで話してくれた。
「職人の良さを引き出していただいた大きなプロジェクトになったと思いますよ」
内野氏もうれしそうにこう語る。今あるものを再生させる「循環型建築」が、プロフェッショナルたちが集まることよって実現したので。

銅の可能性を広げる建築物

「銅は人間的で温かみがあるし、経年変化する魅力もある。木と銅は相性がいいですよ。今回のプロジェクトでそのことを改めて実証できたと思います」
隈氏に銅と木材の組み合わせについての印象をたずねると、このような力強い言葉が返ってきた。「和國商店」の外観はモダンでありながら歴史を感じさせるざらつきのようなものもある。見る人にこの不思議な印象を与えているのは、まさに銅の力ということなのかもしれない。
キッチンカウンターをはじめとして真鍮が多く使われている内装も特徴的だ。

「真鍮のアイデアは内野さんからだったね。真鍮って、建築では部分的に使うけど頻繁には使わないんですよ。だから、これを大々的に使うっていうのは、面白いと思ったんだよね。結果的に、一般的な内装とはまったく違う空間を作ることができたから、これはブームを起さず、と思ったね」
隈氏にとって、板金のプロフェッショナルである内野氏とのやりとりは発見の連続だったようだ。建材として長い歴史のある銅の魅力については、隈氏はこう

まなことが偶発的に決まっていき、少しずつ形になっていったのだ。神社の廃材である自然発生の緑青銅板と一緒に、金属外装材メーカーのタニタハウジングウエア株式会社が手がけた人工緑青銅板も使用されている。この組み合わせも、実は最初から狙ったわけではない。
「神社の廃材は限られているので。単純に数が足りなかったんですよ」と、内野氏は話してくれた。
「だから、立体部分は神社の廃材、平面部分はタニタさんの人工素材を使うと面白いんじゃないかな、と思ったんです」
確実に決まっていたのは築52年の空き店舗を利用するということ。この建物のリノベーションを手がけたのが岡庭建設だ。この建物、なかなか年季の入った物件だったらしい。
「最初は傘をささなくてはいけないくらい、雨漏りしてましたね」

考える。

「今の時代、工場で大量生産されるものにみんな価値を見出せなくなっているんじゃないかな。工場では作れない、手作りのものに魅力を感じるようになってきている。銅は手作りに対応できる素晴らしい素材だと思いますね」
さらに、板金全般についてもお話しいただいた。
「日本って板金技術は世界一だと思っんですよ。屋根から壁まで、どんな複雑なものでもしっかりと作り上げる。木造と板金の組み合わせっていうのは、雨と地震が多い日本が昔から磨いてきた技術なんです。日本の板金は技術的なものと美的なものが両立していますし、無形文化財の可能性も秘めていると思いますよ」

街並みがどんどん古くなってきても、木造と板金の組み合わせで再生することができるかもしれない。「和國商店」はその可能性を示すプロジェクトになったんじゃないかな。どんなに古くてもこんな風によみがえるんだ、という自信を人々に与えられる建築ができたと思いますよ」

地域を盛り上げ、見る人を笑顔にする街のシンボル

優れた技術には人を引き寄せる力があるようだ。「和國商店」の銅板の形状って、3パターンしかないんですよ。でも初めて見るとすごくたくさん種類があるように映るんですよ。隈さんが意図的にデザインされているんですけど、光の当たり方でランダムに見えるんです。ずっと見てる人もいますよ。面白いんですけど、人って上を向いてると口角が上がって笑って見えるんですよ。『和國商店』を見ている人たちがみんな笑って見える。これも隈さんの設計なのかと思えましたよ」
内野氏の言葉を聞いて、隈氏も池田氏も笑顔になった。
地域のシンボルとして、技術を継承する建築物として、銅板をまとった「和國商店」は、今日も訪れる人を笑顔にしているはずだ。

